

分布：全国

ツユクサ (ツユクサ科)

学名: *Commelina communis*

露草

別名：ぼうしばな、ほたるぐさ、とんぼぐさ、つき草、むらさきばな

主な生育場所

畑や水田畦畔、路傍、林縁などに生える。低地から高地まで普通にみられる。どちらかというとやや湿った場所を好む。また、日当たりのよい場所に多いが、日のあまり当たらない環境でも生育できる。

特徴

高さ30～70cmくらいとなり、茎は柔らかく根もとから多く枝分かかれし、節から根を下ろして地面を這う。葉は長さ5～8cmほどで、平行な葉脈がみられる。花は大きな花びら2枚と小さな花びら1枚とからなる青紫色で編み笠状の包葉に包まれる。長いおしべ2本、中くらいのが1本、短いのが3本の計6本のおしべがある。



大きな花弁2枚と小さな花弁1枚からなる花

名前の由来：コバルトブルーの鮮やかな花は、朝開いてその日の夕方には閉じてしまう短命さから「露草」。また、編み笠状の包葉に花が包まれている様子から「帽子花」。

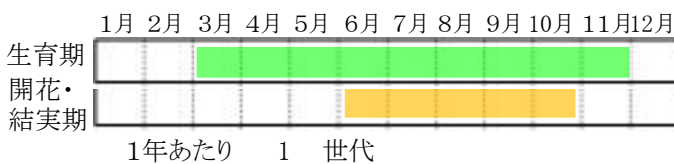
<農業との関係>

畑や果樹園では強害雑草となりうる。特に果樹園など耕起が少ない環境でびっしりと群生することがある。また、陸稲(おかぼ)田に発生すると、稲の減収率が大きくなる。除草した植物体はそのまま土の上に置いておくと節から発根して再び根付いてしまうほど繁殖力は旺盛である。



平行な脈で細長い卵状の葉

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 主に関東地方よりも南の暖かい地方には、ツユクサよりも葉の幅が広くて丸みを帯び、縁が波打つ葉をつける外来種のマルバツユクサがよくみられる。また、園芸種由来で常緑の白い花をつけるトキワツユクサがある。

<一言うちく>

京都の伝統工芸品の1つである友禅染では、ツユクサの変種であるオオボウシバナ(大型の花をつける)花弁から抽出した色素を和紙に染みこませ乾燥させた「青紙」を使って下絵が描かれる。その後、本絵付けの後、水洗いすると、ツユクサで描いた下絵はすぐ落ちてしまう。



暖地に多いマルバツユクサ

<人との関わり合い>

色素は水に溶けやすいので染料としては不向きだが、染め物の下絵用として利用される。また、若い葉や柔らかい茎先は食べることができ、塩ひとつまみ入れた湯にくぐらせ、水にさらして湯がいてお浸しやサラダにする。花付きの茎先は天ぷらにしてもよい。また、生薬「鴨跖草(おうせきそう)」として、全草は解熱、解毒、風邪、利尿薬としても用いられる。

<俳句や短歌への登場>

【季語:秋】

百に千に人は言うともつき草の移ろうころ吾もためやも(万葉集・作者未詳) ※つき草=ツユクサ

つゆ草に袖すりませむ秋萩のひと花衣色深くとも(藤原基家)

露草も露のちからの花ひらく(飯田龍太)